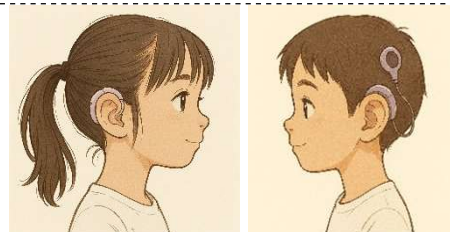




聴覚に障害のある子どもへの指導・支援

先天性の聴覚障害児の場合、「きこえる」とはどのような状態であるか、自分がどの程度「きこえない」かについて理解することは難しいです。聴覚障害によって生じる生活上の支障や、さまざまな困難を経験し、成長とともに「きこえない」ことを認識していきます。



障害認識は、聴覚障害児自身がきこえないために生じる困難さを理解し、それを改善する方法を身につける考え方や態度を形成することです。聴覚障害児が、聴覚障害のある自分を肯定的に認識できるように、専門機関、学校、家庭が連携した継続的な支援が必要です。

障害認識の発達と支援の例「聴覚障害のある子どもの理解と支援 学苑社」から引用

発達段階		障害の認識	支援
幼児期 (0～5歳)	3～4 歳児頃	自分だけ補聴器をつけている ことに気付く	家族の聴覚障害への理解を促す 子どもたちが十分に受け入れられる 子育て
	4～5 歳児頃	家族に疑問を投げかける	
学童期 (6～12歳)	低学年	すべて聞こえていると認識している 特別扱いを受けることに違和感	同じ障害の子どもたちとの交流 在籍学校での障害理解授業 耳のしくみやオーディオグラムの理解 聞こえにくい状況を知る 聞こえにくい状況への対応を知る
	中学年	障害に対する漠然とした意識化 聞き取れないことへのストレス	
	高学年	障害への意識の明確化 聞こえている友人との同化	
青年期前期 (12～15歳)		一人で悩みを抱え込みやすい 相手に伝わりやすい開示方法 の工夫を試みる	同じ障害の子どもたちとの交流 大人の聴覚障害者との交流 何でも気軽に相談できる大人の存在 学習面のフォローアップ
青年期中期 (16～18歳)		自己努力でカバーする限界を感じ、 聞こえづらい自分を受け入れ始める	
青年期後期以降 (19歳～)		社会的コミュニケーション場面が増加し、 聞こえづらいことによる困難場面の増加	聞こえにくい状況への対応を知る 福祉サービスに関する情報提供